発達理論の学び舎

Back Number: Vol 136

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2701. 音楽教育と日本の伝統的な音楽への傾倒

2702. オリヴィエ・メシアンの音楽世界と耳の再調律

2703. 目醒めの先に待つ荒野

2704. 清算

2705. マルティニ教会でのパイプオルガンコンサートに向けて

2706. 日記と作曲

2707. ベートーヴェンとゴッホの芸術性及び精神性の発達研究に向けて

2708. マルティニ教会でのパイプオルガンコンサートに参加して

2709. マルティニ塔の印象の変化と内面の深化

2710. ロンドン小旅行計画:ウェストミンスター寺院でのパイプオルガンコンサート

2711. 音楽理論や作曲理論の解説書から得られること

2712. 運河のほとりの一羽のカモ

2713. 旅行を求める内側の何か

2714. 鬱積と形象化

2715. 時代と個人の芸術性

2716. 絵画を眺めるように楽譜を眺めること

2717. 外国語を学ぶ意義と人間発達

2718. 「外国語を学ぶ意義」の続き

2719. 変容作用を持つ曲の創出に向けて

2720. 迫る旅に向けた期待と音楽体験の不思議さ

© YOHEI KATO 2018

2701. 音楽教育と日本の伝統的な音楽への傾倒

昼食の時間が迫ってきている。昼食を摂る前に午前中の活動について振り返っておきたい。

今日は午前中に、“Spirituality and Music Education: Perspectives from Three Continents (2017)”を読み進めた。実はこの書籍は数カ月以上も前に購入をしようと思っていたのだが、結局購入をしたのはつい先日だった。先ほどこの書籍の一読目を始めたところ、今の私の関心に完全に合致しており、本書を食い入るように読み進めていった。全部で14章ほどの構成になっており、ちょうど半分を読み終えた。

本書は、様々な研究者が精神性（spirituality）の観点から音楽教育に関して執筆した論文を基に構成されている。半分を読み進める中で、随所に洞察に溢れる記述を見つけ、私は下線を引いたり、書き込みをしたりしていた。この書籍は間違い無く、今後音楽教育について考察を深めていく際の核となる専門書になるだろう。午後からも引き続きこの書籍を読み進めていけば、今日中に一読目が終わるだろう。

初読が済んだ直後に、自分が下線を引いた箇所や書き込みをした箇所をもう一度読み返したいと思う。その後少しばかり日数を開けてから再読をしたいと思う。本書は自分にとってそれほどまでに繰り返し読むに価する書籍だ。

早朝、いつものように一日分のお茶を入れようとしていたところ、ティーバッグのタグに“Your strength is your own knowledge”という言葉が付されていた。私はそこに書かれていたknowledgeという言葉よりも、wisdomの方がふさわしいだろうと思っていた。確かに知識は私たちの力になるが、真に力となるのは叡智であろう。そんなことを早朝に考えていた。

午前中には上記の書籍以外にも作曲理論に関する書籍を読んだ。二冊の書籍に触発されて、私はふとオーケストレーションの技法を本格的に学び始めようと思った。しかし私は、交響曲を作る気は一切ない。何に関心があるかというと、日本の伝統的な楽器の幾つかを組み合わせて曲を作るということだ。特に今は琴と尺八に関心を持っている。

午前中に少しばかり、オーケストレーションに関してどのような専門書があるのかを調べていた。ウォルター・ピストンが執筆したハーモニーや対位法の書籍を以前に購入しており、彼が執筆したオーケストレーションに関する書籍を購入しようかと考えている。その他には、Cecil Forsyth（1870-1914）という英国の作曲家が執筆した書籍、もしくはNikolai Rimsky-Korsakov（1844-1908）というロシアの作曲家が執筆した書籍を購入するかもしれない。それらの書籍はどれも、西洋音楽のコンテクストに基づいたオーケストレーションの技法について解説している。

私が作りたいのは西洋音楽的な交響曲ではなく、日本の伝統的音楽のコンテクストに根付いた和的な曲である。仮に琴と尺八を用いた曲を作るのであれば、それらをどのように組み合わせて作曲したらいいのかを考えていく必要がある。その際に上記の書籍はオーケストレーションの技術に関して重要な視点を与えてくれるだろうが、それだけでは不十分だろう。そうした問題意識を持ってさらに調べてみると、三木稔氏が執筆した書籍の英訳“Composing for Japanese Instruments (2015)”を見つけた。

中身を確認すると、これは非常に優れていると判断し、今の自分の関心にも完全に合致するものであったため、購入を決定した。また合わせて、日本の伝統的な楽器と日本の古代の音楽をより理解するために“Traditional Japanese Music and Musical Instruments (2001)”も購入することにした。

ピアノ曲を引き続き作りながらも、琴や尺八などを用いた曲を積極的に作っていきたいと思う。全て独学で作曲に関する諸々の事柄を学んでいく。その歩みの最中に壁に突き当たるたびごとにゴッホの歩みを思い出すようにする。フローニンゲン：2018/6/14（木）12:20

2702. オリヴィエ・メシアンの音楽世界と耳の再調律

天気予報の通り、昼食を摂っている最中から急に小雨が降り始めた。食卓の窓に少しずつ雨滴が付着する様子を静かに眺めている。

ゴッホは孤独の中で絵画制作に打ち込んだと言われているが、彼のそばには常に弟のテオがいた。ゴッホとテオとの手紙のやり取りを見れば、どれほど二つの魂が一つであったかがわかるだろう。弟のテオに向けて手紙を絶えず書いていたゴッホの孤独さについて考える。ゴッホの手紙にはテオという読み手がいた。テオとの対話が手紙を通じてなされていたのである。

毎日四六時中日記として読み手のいない文章を書いている自分についてふと考えてみると、思わず可笑しさがこみ上げてきた。こみ上げてきた可笑しさの後に待っていたのは、それでも日記を書き続けていくという精神であった。自分には本当にそれしかない。書き続ける中で日々を過ごしていくこと。

冷たそうな雨が静かに降っている。それは激しい雨では決してなく、雨滴が静かに窓ガラスに付着しては消えていく類の雨だ。

昼食を摂りながら、日本の伝統的な音楽を探究するという観点において日本中を旅したいという思いが湧いてきた。それは幾分民族音楽的な旅だと言えるかもしれない。日本の伝統的な音楽を知るために探究をするのではない。あくまでも曲を作るために探究をしていく。

知るための探究はもうやめにした。今後は作るための探究しかしない。それは作曲だけではなく、その他の実践活動全てにおいて当てはまる。

画家がモデルの肖像画を描くように、人物を音楽として表現していくことも可能なのではないかとふと思う。その人から喚起されるイメージや内的感覚を曲にしていく。人物をスケッチするかのように、はたまた油絵として描くかのように、人物を曲として表現したい。とにかく表現手段の技術を高めていく。それに合わせて思想も深めていく。技術と思想の双方を絶えず高めていくことに努めること。

それらの深まりは、自己及び人生を深めていくことだと知ってしまった。また、それらが深まりを見せれば見せるほど、この世界への関与も深まることを知ってしまった。作曲に伴う技術と思想を深めていくことにこれからは一層精進したい。

昼食を摂りながら改めて午前中に調べていた書籍の何を購入するかを考えていた。結局、西洋音楽のコンテクストに基づくオーケストレーション技術に関する専門書を購入することはやめた。理由は単純であり、交響曲を作ることに一切関心がないことが挙げられる。西洋が産み出した楽器に関してはピアノだけに焦点を絞り、ピアノ曲だけを作っていく。一夫一妻制を頑なに守ろうと思う。

一昨日、入浴中にオリヴィエ・メシアンのピアノ曲を聴いてみることにした。先ほどまでモーツァルトの音楽を聴いていた自分の耳には耐え難いような音楽であったので、すぐに音楽を消して再度モー

ツァルトの音楽をかけた。しかし、なぜメシアンの曲があれほどまでに聴くに堪えないものだったのかに対して強い関心を持った。自分の耳が何らかの文化的な影響やこれまでの教育や生活によって慣らされてしまっており、それがゆえにメシアンの曲を聴くに堪えないものだと判断したのであればその判断を一度保留にする必要があると思った。

そうした幾分奇妙な観点からメシアンの音楽に関心を持ち始めた。一体彼がどのような思想と知識を持って作曲していたのかを知るために、メシアンが執筆した書籍の英訳“The Technique of My Musical Language (1956)”を購入することにした。

ピカソの晩年の作品を見てその世界観の深さがすぐにはわからないのと同様に、メシアンの曲にもそうした深さが伴っているように思える。メシアンが生み出す音の深くにあるものを理解するとき、自分の耳は再調律され、自分の内側にまた新たな音楽世界が広がるような気がしている。

結局、西洋楽器を用いたオーケストレーション技術に関する書籍を購入することをやめたので、その代わりに“Composing for Japanese Instruments (2015)”と“Traditional Japanese Music and Musical Instruments (2001)”、そして上記のメシアンの書籍を今日の夕方にでも注文しようと思う。
フローニンゲン：2018/6/14（木）13:47

2703. 目醒めの先に待つ荒野

時刻は夕方の七時半を迎えた。今日は天気予報の通り、午後から雨が降ってきた。ある地蔵がこの現代社会の何かに対して嘆き悲しんでいるかのような雨だった。今は雨が止み、曇った空が一面に広がっている。

ここ最近発達研究への不信感が募る。カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を例に取ってみると、それは私たちの能力の発達プロセスを説明してくれるのだが、そもそもある能力領域に私たちが関心の目を開いていく要因やメカニズムについてはほとんど何も説明をしてくれない。既存の発達研究においては、ある領域の能力を措定することによって始めて研究や説明が生まれる。私が興味を持っているのは、そもそも人間がそうした一つの能力領域にまるで引き込まれるかのように関心を持ち、その領域を一心不乱に探究していく現象を生み出すものにある。それを人は素質や個性と呼ぶのかもしれない。

先月末にアムステルダムで参加した国際ジャン・ピアジェ学会での体験は自分の目を見開いてくれるものだった。結局、発達研究者というのは、「発達研究という名のゲーム」に盲目的に従事しているに過ぎないというある種の醒めを経験した。

各研究者の情熱と功績に敬意を払いながらも、私は彼らの盲目的な純朴さに少なからず落胆をした。「学者とは知性の高い頓馬なのだ」という言葉を頭の中で何度も唱えていた理由が明確になりつつある。彼らはそもそも自分が従事している研究という一つの狭いマトリックス世界の中の住人に過ぎず、マトリックス世界を対象化するほどの認識力を持ちえていない純朴な人間なのだということを突きつけられたような気がした。

人間発達とそれを取り巻く現代社会そのものを考察していく際に、発達科学は確かに重要な役割を果たすが、いつも肝心なことを説明してくれない。それが何かについては間接的に何度もこの日記で説明している。発達研究の枠組みでは埒があかないというのが正直な気持ちだ。発達研究に純朴に打ち込む研究者たちの姿を認識できてしまった瞬間に、それはもう自分がそのマトリックス世界で生きていけないことを示唆しているように思える。

科学的な発想と手法にのみ立脚するような探究からはもう抜け出そうと思う。これは以前から思っていたことであり、過去の日記でも言及していたことだった。だが今日改めてその思いをいっそう強くした。

今日はこれからエリック・サティの手紙を読む。先日ドイツのアマゾンで購入した“Satie: Seen Through His Letters (1989)”を読む。この書籍と合わせてゴッホの手紙も読んでいく。サティにせよ、ゴッホにせよ、彼らは当時の社会から疎外された異端児であった。自分がなぜ彼らの生き方と生涯に関心を持っているのかはもう明らかだ。

天国のように思えた夢が醒めるとき、そこに待っていたのは地獄のような荒野であった。私たちが真に醒めを経験するというのはそういうことを意味するのだろう。その荒野に水はあるのだろうか、花は咲いているのだろうか。夢の中を歩いていたときには感じられないものがそこにはある。荒野を歩くにつれて、初めて自分の足で歩いているという確かな感覚がある。フローニンゲン：2018/6/14（木）20:09

No.1071: Affection from the Sky

Today looks like as if the sky poured affection on the ground, though it should be everyday; our feeble minds don't recognize it, which is unfortunate for us. Groningen, 08:17, Tuesday, 7/17/2018

2704. 清算

再び小雨が降り始めた。冷たく寂しそうな雨が降りしきっている。通りを走る車の水しぶきを上げる音が聞こえる。書斎の窓際に行って外を眺めると、雨に濡れながら自転車をこぐ人たちの姿を見た。

明日は晴れるそうだ。明日のことなどどうでもいい。

先ほど夕食を摂り終えた後に、居ても立っても居られずにデッサンをした。ノートを取り出し、普段使っているよりも大きなスペースに絵を描いた。そこには、感情を露わにするような激しい絵が描かれた。一つ描いただけでは描き足りず、もう一つ描いた。今日は何か特別なことがあったわけではないのに、随分と感情が高ぶっているように思える。

時刻は夜の八時半を迎えた。空は雨雲に覆われていながらも、フローニンゲンのこの時間帯は夕方のような明るさを持っている。昨日気づいたが、今が最も日が伸びている時期なのではないかと思う。昨夜は夜の十時を迎えても完全に日が沈んでいなかった。ここ最近はまだ明るいうちに就寝することが多くなってきている。

いつか全ての事柄を清算して人生をやり直したいと思うような気持ちが顔を覗かせる。これまでの人生をいったん仕切り直すような行動に出ようとする自分が内側にいることに気づく。近親者と非常に親しい友人以外の誰とも連絡が取れないようにして、この世界のどこかで暮らす生活。近親者と親しい友人以外は一切連絡が取れないような生活の中にあっても、日記と作曲実践だけが継続していく。それだけは途絶えることがない。

文章の書き手と曲の作り手には一切連絡ができないのだが、形になっていくものだけが積み重なっていく。そんな生活の姿を想像していた。正直なところ、今の自分が理想にしている生活はそれな

のだと思う。私はまだ自分や他者に嘘をつきながら生きている。いつかこの嘘をやめなければならない。

自分は何者でもないことを再度確認し、もう一度新たに始めなければならない。そんなことばかりを最近よく考える。この世界とは違う世界で生きていくという覚悟はすでにある。あとはいかに誠実にかつ上手に諸々の清算手続きを進めていくかだ。

雨脚が少しばかり緩やかになった。改めて上記の事柄について考える。

自暴自棄になりすぎないようにする。しかし、上記の事柄は自暴自棄な判断ではない。この世界の外に広がる世界に気づいた者であれば、誰でも必ず考えることだ。きっとそうに違いない。

昔から自分は極端な人間だと言われてきた。でもこればかりは真に人間として生きていくために必要な極端さなのだと思う。中庸の道など歩かない。砂漠もしくは崖の上を歩いていく。この世界の外に広がる世界が見えた時、そこに向かおうとするのは必然なのだろう。そこに向かおうとする衝動を抑えることはできない。

果たして人間はいかほどに人間として生きられるのか。それだけが自分を強く惹きつける。この世界の外側に歴然として存在している世界の中で自己の生活を築き上げていくこと。この世界の外側の世界で真の充実感と幸福感を見出しながら生きること。それらが見出せるのかなどは分からない。

発達とは呪うべき現象でもあるということがはっきりとわかってくる。発達の不可逆性。気づいてしまったその世界を帳消しにすることなどできない。この世界の虚構性にひとたび気づいてしまったら、それをなかったことにすることなどできはしないのだ。発達した人間の末路。それはそれでも歩くこと。

上記で書き記した、これまでの人生をいったん仕切り直すということは厳密にはできない。区切りを設けて新たに歩むことならできる。だが、己の歴史から逃れることはできない。それは呪縛のように常に私たちにつきまとっている。消し去ることのできない自己の歴史に気づく。過去の歴史を引きずりながらでも、この世界の外の世界で新たに生きることに向かっていく。いつか必ず極端だと思われる極端ではない行動に出る。

雨が止み、小鳥のさえずりが聞こえ始めた。自分は一体何を書いていたのだろうかと我に返る。

自分が書いた文章を少しばかり読み返してみる。至って当然な事柄が淡々と書かれている。

後数年ほど自分に猶予を与えたい。全ての事柄を誠実に清算していくための時間はそれぐらい必要だ。フローニンゲン:2018/6/14(木)20:59

No.1072: Tender Feelings

Today's weather in Groningen is beautiful, and it has a very calm atmosphere. Listening to the sound of breeze, my feelings become tender. Groningen, 08:51, Wednesday, 7/18/2018

2705. マルティニ教会でのパイプオルガンコンサートに向けて

今日は六時前に起床し、六時を少し過ぎたあたりから一日の活動を開始した。最初に行ったのはいつもの通り身体運動であり、その後すぐにデッサンをした。早朝の内的感覚をすぐさま絵として表現してみること。それが習慣になりつつある。

先ほど描いた絵はとても穏やかで、薄い青と緑の二つの波が緩やかに交わっているような絵であった。昨夜にはかなり激しい絵を二つほど描いていたのとは対照的に、今朝の絵はとても穏やかなものだった。それらの対照的な絵は、まさに自分の精神状態を物語っている。今朝はとても穏やかなようだ。

作曲にせよ、デッサンにせよ、言葉ではなく他の表現手段を用いて内側の感覚を外側に形としてみると思わぬ発見がある。また、言葉とは異なる性質の治癒作用と変容作用がそこにあることにも気づく。内面に焦点を当てて文章を書くことは、ナラティブを通した治癒と変容がそこに起こる可能性を秘めている。一方で、作曲に関しては音を通じた治癒と変容がそこに生まれうる可能性を持っており、デッサンに関しては絵を通じた治癒と変容がそこに生じうる可能性がある。

言葉、音、絵、それらの三つの手段を媒介にさせて内側のものを外側に形にしていくことから離れられなくなった。自分にとってはこれら三つが無くてはならない。今日もそれら三つを通じて生きていくことになるだろう。

今日は午前中に作曲理論に関する書籍と音楽教育に関する書籍を読もうと思う。前者に関しては、“Music Composition 2 (2014)”を読み、後者に関しては、“Experiencing Music: Restoring the Spiritual Music as Well-Being (2016)”を読む。

前者の書籍については昨年に二、三回読んでいる。今日は久しぶりにこの書籍を読み返すことによって、抜け漏れてしまっている知識を補充し、さらには、以前理解のできなかった箇所に関する理解を深めたいと思う。絶えず小さな学びを積み重ねていき、絶えず小さな実践を積み重ねていくこと。それがいつか大きな構築物を自分の内側に築いてくれる。そのようなことを毎日思いながら私は学習と実践を日々続けている。

後者の書籍に関しては今回初めて読む。昨日読んだ、“Spirituality and Music Education: Perspectives from Three Continents (2017)”と同じ出版社から出版されているものであり、編集者も同じだ。昨日読んだ書籍からは随分と多くの気づきを得ることができ、考えが深まるきっかけを随分と与えてもらったように思う。本日読み進める書籍にも同様の期待をしている。

それらの書籍を読み進めることに合わせて、昼食前に一度作曲実践を行いたい。これは昼食後にもまたがる実践になるだろう。

昨日はどういうわけか作曲実践があまりうまく進まなかった。確かに一曲を作ることには作ったが、音を生み出す生命力のようなものが少し弱体化していたように思う。自分の内側にある音も言葉と同じであり、変動性を持っている。つまり日によって波があるということだ。昨日はそれを実感するような一日であった。

今日はパイプオルガンのコンサートに参加する予定であり、もう一度コンサート会場の教会のウェブサイトを眺めていると、開始時刻が少し遅いことに気づいた。当初参加予定だったのは、Nieuwe教会で行われるコンサートであり、16時からコンサートが開始のはずであった。ウェブサイトを訪問し、オランダ語を英語に翻訳しながら読み進めていると、16時からのイベントはオルガンのお披露目会のような役割を持っていることがわかり、実際のコンサートは18時からということがわかった。

修理に出していたオルガンが戻ってきたのか、今日はこの教会にとって特別な日のようであり、18時から23時まで、五時間ほど「オルガンマラソン」と題される長時間に渡る演奏会が行われるようだ。

夕食と就寝の問題もあるので、今日はこの教会で行われるコンサートではなく、街の中心部のマルティニ教会で行われるパイプオルガンのランチコンサートに参加することにした。コンサートの開始時刻は12:45であるから、昼食は早めに取り、昼食後の作曲実践は一旦保留にしておきたい。

余裕を持たせるために、自宅を12:20には出発しようと思う。フローニンゲンの街の象徴であるマルティニ教会でパイプオルガンを聴くのは初めてであるため、非常に楽しみだ。Nieuwe教会のコンサートに関しては八月と九月にも幾つかコンサートがあるようなので、その時にこの教会を訪れたいと思う。フローニンゲン：2018/6/15（金）07:06

マルティニ教会での本日の演奏曲

F. Couperin (1668-1733): Enkele delen uit: Messe Pour les Convents

J. Alain (1911-1940): Choral Dorien

A. van Noordt (1619-1675): Psalm 24

D. Buxtehude (ca. 1637-1707): Fuga in C groot (BuxWV 174)

J.S. Bach (1685-1750): (1) Allein Gott in der Höh' sei Ehr (BWV 663), (2) Prelude en Fuga in C groot (BWV 545)

演奏者：Jan Willem Jonkman

No.1073: A Graceful Flow of Time

Living in a graceful flow of time becomes a stable state of my life, which is contributing to enriching my daily life. Groningen, 09:08, Wednesday, 7/18/2018

2706. 日記と作曲

今日は夕方からのパイプオルガンコンサートではなく、昼食どきに行われるコンサートに参加することにした。今はうろこ雲が空を覆っているが、今日は晴れのようなので、マルティニ教会まで散歩することが楽しみだ。

12:20に自宅を出発するため、午前中の仕事は少し前倒しで進めていき、昼食を早めに摂る必要がある。コンサートが終わったら、その足でクリーニング屋に立ち寄り、先日クリーニングをお願いし

ていたコートとマフラーを受け取りたい。今週一週間は相変わらず肌寒い日が続くようであり、気づかない間に夏が終わり、コートとマフラーが必要になる季節がやってくるのもあっという間かもしれない。

昨日、日本の伝統的な楽器の音域や日本の伝統音楽の背景的な知識を得るために、“Composing for Japanese Instruments (2015)”という書籍を購入した。元々の著者は三木稔氏である。本書を何度も繰り返し読むことによって、少しでも日本の伝統的な音楽に対する理解が深まり、その枠組みを通じて作曲ができればと思う。西洋音楽の枠組みを通じてピアノ曲を作曲し、日本の伝統的な音楽の枠組みを通じて日本古来から伝わる楽器を用いた曲を作っていきたい。

そのような思いが日増しに強くなる。ピアノ曲や日本の古典楽器で曲を作りながら世界中を旅したいという思いに昨日捕らえられていた。世界の各地をゆっくりと巡りながら、その土地から喚起されるものを曲として表現していくこと。その土地で見えるもの、聞こえるもの、感じられるもの、考えられるものを曲として表現していくことへの思い。

この旅はできれば船旅にしたい。船で世界中をゆっくりと周り、旅の合間合間に曲を作っていく。そのような船旅にいつか出かけたいと強く願う。世界中を船で周る旅に加えて、私はいつか日本全国を旅しながら曲を作りたいとも思う。最近この思いが芽生えた。

日本にはまだ足を運んだことのない場所が沢山ある。日本の伝統的な音楽に対して関心を持ち始めたのは、もしかすると日本の土地が自分を呼んでいるからなのかもしれないとふと思う。日本全国をゆっくりと巡る旅の実現は随分と後になるかもしれない。仮にそうだとしても、その日はいつかやってくるだろう。その日の実現に向けて、今はとにかく自由自在に自分の内的感覚を曲として表現できるまでに作曲技術を高めていく必要がある。日記を自由自在に綴るように、自由自在に作曲をする境地に向かっていく。

自分の人生において今最も優先されるべきことはそれだ。ふとそのような思いを持つ自分について考えてみると、私は文筆家になろうというわけでは決してなく、作曲家になろうというわけでも決してないことが興味深い。それにもかかわらず、日記を執筆することと作曲実践が自分の人生において

最優先されるべき活動になっている。言葉と曲を用いて自分の内側にあるものを外側に形にすること。それは私の根源的な何かとつながっているに違いない。

今日も日記を書き、曲を作る。明日も明後日もこれからも、日記と作曲と共に生きて行く。フローニンゲン:2018/6/15(金)07:29

No.1074: A Gentle Cradle

When a wind blows, a cradle surrounding me rocks. This reality is a gigantic cradle. Groningen, 09:04, Thursday, 7/19/2018

2707. ベートーヴェンとゴッホの芸術性及び精神性の発達研究に向けて

少し早いがもう少ししたら昼食を食べようと思う。早朝の日記に書き留めていたように、今日はこれからマルティニ教会に行き、パイプオルガンのランチコンサートに参加する。

今日は肌寒いが、一日を通して晴れのようであるため、教会までの散歩はとても気分の良いものになるだろう。初夏の花々が満開に咲く中をゆっくりと歩き、マルティニ教会に向かっていく。

私は民族音楽学者になるわけでは決してないが、欧州にいる間に欧州の文化と音楽との関係を探っていきたいと思う。自分が欧州にいる意味、欧州に根を下ろして生活を営んでいる意味を考えなければならない。この土地で生活をすることでしか得られない感覚や学びを逃すわけにはいかない。今はその関心が音楽に向かっている。

今日これからパイプオルガンのコンサートに参加するのも、この国に根付く音楽文化を理解することに一つの目的がある。今年は特に教会で行われるパイプオルガンのコンサートには積極的に足を運ぼうと思う。旅をするのと同じぐらいに意欲的に教会に足を運ぶ。欧州での三年目の生活は、旅とパイプオルガンのコンサートを中心に回っていくだろう。

昨日購入した書籍を見てわかるように、私は欧州での生活を通じてこの地に根付く西洋音楽を理解しようとすることに関心があるだけではなく、日本古来の伝統音楽と日本の風土との関係にも関心があるのだと気づく。それらは純粋に自分の好奇心と探究心からなされる。書籍を読むだけでは

なく、実際に欧州の各地を旅し、できればいつか日本の各地を旅しながら、直接体験を通じて音楽に対する理解を深めていく。

しかし忘れてはならないのは、決して私が音楽学者になるわけではないということであり、それらの探究は自らの人生を深めるため、そして作曲の手助けのためにあることを忘れてはならない。

先ほど、ゴッホの芸術性及び精神性の発達に関してより深く理解するために、二冊の書籍をイギリスのアマゾンから注文した。一冊は“Vincent Van Gogh: His Spiritual Vision in Life and Art (2016)”というタイトルの書籍であり、もう一冊は“The Shoes of Van Gogh: A Spiritual and Artistic Journey to the Ordinary (2004)”というタイトルの書籍だ。

ゴッホの手紙の全てと無数のイラストが収められた全六巻の“Vincent van Gogh – The Letters: The Complete Illustrated and Annotated Edition (2009)”と合わせてそれらの書籍を読んでいく。突然私は、ベートーヴェンの手紙とゴッホの手紙を比較研究することを通じて、彼ら二人の芸術性と精神性の発達過程を読み解きたいという思いに駆られた。この比較研究は定量的には決して行わない。そのような味気のないことはしない。徹底的に定性的なアプローチを用いて探究を進めていきたい。

二人の偉大な芸術家の手紙を読み解く際には、“The Art and Science of Portraiture (1997)”という書籍に紹介されている定性手法が有益だろう。この比較研究の際には、ジェームズ・ファウラーの主著“States of Faith (1981)”を久しぶりに参考にしながら、ファウラーの発達モデルを活用しながらベートーヴェンとゴッホの芸術的信念の発達過程を辿ってみたいとも考えている。

ベートーヴェンの発達過程を辿る際には、ゴッホの全六巻に渡るような膨大な資料がなく、まだまだ研究材料が少ないが、昨年に購入した“Beethoven’s Letters (1972)”と “Beethoven His Spiritual Development (1936)”を研究材料にしたい。

この研究は緩やかに進めていくつもりである。ベートーヴェンとゴッホの生き様と作品群が私に与えた影響の大きさを考えると、この研究を博士論文のテーマにしてもいいかもしれないと思う。その際には、単に二人の芸術的発達と精神性の発達過程を辿るだけではなく、そこから芸術教育へのイ

ンプリケーションを引き出せるような研究内容にしたい。この夏から少しずつこの研究に着手する。フローニンゲン：2018/6/15（金）11:04

No.1075: Skin of Life

Although many people may overlook, air has skin, and so a building does. Taking it into account, we know that we always touch the skin of others──both animate and inanimate beings. It seems to me that this reality consists of skin, and that many people forget that the only fulness of skin exists in this world. Groningen, 09:22, Thursday, 7/19/2018

2708. マルティニ教会でのパイプオルガンコンサートに参加して

晴れ渡る穏やかな午後。たった今、日課である仮眠を取り終え、これから午後の取り組みに従事したいと思う。

昼食後に参加したパイプオルガンコンサートの余韻がまだ全身に残っている。昼食を早めに摂り終え、少し休憩をしてから、私はフローニンゲンの街のシンボルであるマルティニ教会に向かった。今日のパイプオルガンコンサートはそこで行われる予定になっていた。教会に向かう足取りは軽やかであり、今から参加するコンサートに対して心が高鳴っていた。

教会まで向かう道はいつもの通りであり、途中に行きつけのチーズ屋の前を通り、中央市場の前を通った。今日も市場が賑わっており、市民と観光客の双方が市場で様々な品物を眺めている姿を見た。市場まで来るともうマルティニ教会のてっぺんが見えてくる。普段マルティニ教会を眺めることはよくあるのだが、教会に近づくにつれ、改めてまじまじと眺めてみると、その荘厳さに息を呑んだ。

マルティニ教会とマルティニ塔は併設されており、塔の時計を見ると、時刻はコンサートが開始される五分前を示していた。改めてマルティ教会を眺めた後、私は教会の中に入った。入り口で今日のコンサートの参加費である1ユーロを支払い、プログラムをもらった。教会の中に足を踏み入れると、非常に懐かしい感じと新鮮な感じの双方が訪れた。

まず懐かしい感じについては、今から二年前の夏にこの教会でフローニンゲン大学の入学式が行われた時の記憶が思い出されたのである。ここは確かに教会なのだが、非常に規模が大きく、収容

人数はかなり多い。久しぶりに教会の壁や天井を眺めた時、二年前のあの印象的な入学式のことが自然と思い出された。一方で新鮮であったのは、今から二年前に訪れた時には見落としていたような装飾が教会の壁に掛かっていたことだ。また、地面に刻印された文字盤や天井の壁画なども見落としていたことに気づき、それらを眺めた時にこの教会の歴史の重みを改めて実感した。

壁や天井を眺めて感じた新鮮さ以上に目に飛び込んできたのは、言うまでもなく巨大なパイプオルガンだ。二年前の私はパイプオルガンに一切関心がなかったため、おそらくそれを一瞥はしていたであろうが、当時はほとんど何も感じなかったように思う。しかし、今このようにしてパイプオルガンに強い関心を持ってそれを眺めてみると、この教会が持つパイプオルガンの荘厳さには心を打たれるものがある。第一印象として、人間の手でこのようなものを作れるとは思えない代物だ、という感想を持った。

私はゆっくりとパイプオルガンに近寄って行き、空いている席に腰掛けて、コンサートが始まるまでの間パイプオルガンに釘付けになっていた。コンサートの開始時刻になると、パイプオルガンの下に壇上があり、そこで演奏者が挨拶を始めた。

今日のコンサートは45分間の長さである。演奏者は挨拶をすませると、パイプオルガンの下にある扉を開け、演奏室の方に向かっていった。そこからの45分間は本当に黙想的な時間であった。巨大なパイプオルガンを眺めながら曲を聴いていると、パイプオルガンという芸術作品を目で鑑賞するのと同時に、音楽を鑑賞するという二重の体験がそこで起きていることに気づいた。パイプオルガンの華やかな天使の装飾、パイプオルガンを支える大理石か何かで作られた石柱に私の意識が向かっていた。

本当にこんな巨大かつ精巧な楽器があることに言葉を失った。45分間のコンサートを終えた後、私はしばらく椅子に腰掛けたまま余韻を味わっていた。しばらくしてから席を立ち、パイプオルガンの方に近寄って行った。真下からパイプオルガンを眺めたり、斜めからそれを眺めたり、今日のコンサートに参加した中で一番熱心にパイプオルガンそのものを観察していたように思う。

パイプオルガンを演奏することは今後訪れないだろうが、この楽器の仕組みと歴史に関心を持った。パイプオルガンの下であれこれと考え事をしていると、演奏者の方が扉から出てきて、笑顔で私に

挨拶をしてきた。私も笑顔で挨拶をし、「素晴らしい演奏でした」と言葉をかけた。それに対して演奏者の方は再度お礼を述べた。

しばらく教会の中を散策し、教会の一階に置かれているいろいろな所蔵品を眺めていた。すると私の右肩を小さく叩く人がいた。振り向くと、先ほど入り口でチケットを手渡してくれた受け付けの女性だった。

受け付けの女性:「コンサートはどうだった？」

私:「素晴らしかったです。マルティニ教会でのコンサートは初めてだったのでなおさら」

受け付けの女性:「それは良かった。来週の金曜日もまた同じ時間にコンサートがあるから是非いらっしゃい」

私:「どうもありがとうございます、ぜひ」

受け付けの女性:「それじゃあ来週またここで会いましょう」

来週もまたこの風情のある教会で荘厳なパイプオルガンの音色を聴けることを嬉しく思った。しかしよく考えると、来週の金曜日はロンドンにいることに気づいた。残念ながら来週はコンサートに参加できないが、来月以降もほぼ毎週何らかのパイプオルガンコンサートがここで行われているようなので、今後も積極的に足を運びたいと思う。今日の体験をきっかけにまた何かが動き出したような気がする。フローニンゲン:2018/6/15(金)15:27

2709. マルティニ塔の印象の変化と内面の深化

時刻は夕方の七時半を迎えた。小鳥の鳴き声が穏やかな夕方の印象をより一層強めている。爽やかな風がフローニンゲンの街を吹き抜けている。この時間帯の明るさを考えると、それを夜風と呼ぶのはまだ早いだろう。

書斎の窓から外を眺めながら、今日の昼食後に訪れたマルティニ教会でのパイプオルガンコンサートについて思い返していた。何度思い出してみても、あの荘厳かつ巨大なパイプオルガンには目を

見張るものがある。一体いつどのように作られたものなのか関心が尽きない。次回教会を訪れた際に関係者の人にあれこれと質問をしてみたいと思う。

コンサートを終えた後、教会を出ると、私は教会の全景をまじまじと何度も眺めた。まずは教会の真下から天空を仰ぎ見るかのように教会のてっぺんを見つめた。その後、少しずつ教会から離れながら教会の全景を眺めていった。立派な時計が四方に備え付けられている。そしてある特定の時刻を知らす立派な鐘の姿が見える。

改めてマルティニ塔をじっくり眺めてみると、二年前によくよく眺めた時の印象と異なるものを今の自分が持っていることに気づいた。印象の変化が起こっている。それは自己の内面の深化を意味していた。そこには印象の深まりがあり、同時に内面の深まりがあった。

マルティニ塔をしばらく眺めた後、目には見えない概念的・思想的な構築物のみならず、物質的に立派な構築物にもやはり感銘を受けるものだとつくづく思った。人間が自らの手であのように精巧かつ厳かな建造物を作れるということに改めて感じるものがあった。

しばらくその場で物思いにふけった後、マルティニ塔を眺めることをやめ、クリーニングに出していたものを受け取るためにクリーニング屋に向かった。その道中、コンサートの影響もあってか、目に映る光景が随分と新鮮なものに映った。日常携えている自分の眼は一体なんなのだと疑ってしまうほどである。純粋な音楽体験は間違いなく意識の変容作用を持っている。

シャーマンや宗教音楽などを思い出すまでもなく、音楽は私たちの意識を変容させる力を秘めている。それは意識の状態の変化であり、一時期的なものなのだが、変容後の意識を深く自覚するとき、それは一時的な体験から一つの経験へと昇華されていく。音楽体験を消費するのではなく、一時的な変容体験に酔うのではなく、それを経験にまで昇華させていくことを前提に、欧州で過ごす三年目は直接的な音楽体験を積極的に数多く積んでいこうと思う。

先ほどまで雲に覆われていた空が少し晴れ、今は西の空に沈みゆく夕日を眺めることができる。今日はもう少しで一日を終えるが、明日もまた旺盛な探究活動と創造活動に従事できることが今から楽しみだ。今日という一日が充実感に満ちたものであったと思えること、そして明日を楽しみに今日を終えることができることほど幸せなことはない。フローニンゲン：2018/6/15（金）20:01

© YOHEI KATO 2018

2710. ロンドン小旅行計画:ウェストミンスター寺院でのパイプオルガンコンサート

週の終わりの土曜日がゆっくりとした速度で始まった。今朝は六時前に目を覚まし、六時半を迎える前に一日の活動を始めた。

目を覚ました瞬間に、雨音が耳に入ってきた。「どうやら雨が降っているらしい」そのようなことを考えながら目を開けた。今朝は早朝に雨が降っており、六時半を迎えた今はもう雨が止んでいる。空の色は薄青く、今は風がない。外の世界で動いているものは小鳥の鳴き声ぐらいだろか。静止した世界の中に小鳥の鳴き声だけが律動を持っている。

いよいよ来週の水曜日にはロンドンに向かう。今回は五泊六日ほどの小旅行だ。このくらいの小旅行が今の私にとってはちょうど良い。

昨日、ロンドンで足を運ぶ場所をもう一度確認していた。美術館や博物館関係についてはすでに目星の場所を以前に調べていた。昨日改めて調べていたのは、オルガンコンサートがロンドン市内で行われていないかということだった。調べてみると、ロンドン市内にも随分と立派な聖堂や教会があり、随所にオルガンコンサートが開催されているようだった。数ある聖堂や教会の中でも、自分の滞在日に合致するコンサートがないかを調べていたところ、一つ目を引くコンサートがあった。

ちょうどロンドンを出発する前日に、ロンドンを代表する一つの建築物であるウェストミンスター寺院でパイプオルガンのコンサートが行われることを発見した。写真を見るからにこの寺院はとても立派であり、改めて調べてみると、ユネスコの世界遺産に登録されているようだ。道理で立派なわけだと独り合点した。さらに調べてみると、私たちにとってなじみ深い始業や就業のチャイムの音階は、この寺院のために作曲された曲に基づいているそうだ。

そこからさらに調べてみると、この寺院は英国にとっても非常に大きな意味を持っている建造物だということがわかった。というのも、歴代の王や女王、そして英国の偉人たちがこの寺院の墓地に埋葬されているからだ。例えば、ニュートンやダーウィンなどの科学者や、ヘンデルやディケンズなどの芸術家などもこの寺院の墓地に埋葬されている。ロンドン滞在の最終日の午後はこの寺院に足を運び、しばらく散策をした後にパイプオルガンのコンサートに参加したいと思う。

大英博物館、ナショナルギャラリー、ヘンデル博物館、ディケンズ博物館、大英図書館などを含め、ロンドンでは自分の関心を引く場所でゆっくりと時間を過ごしたいと思う。今回の小旅行もまた何かを私にもたらしてくれるだろう。その何かを時間をかけて温め、緩やかな時の流れの中で育んでいく。
フローニンゲン：2018/6/16（土）06:47

2711. 音楽理論や作曲理論の解説書から得られること

今日も肌寒い一日となりそうだ。天気予報を確認すると、これから一週間は今のような肌寒さが残るようだ。おそらく七月の半ばまでこのような気温が続くのではないかと思われる。

来週の水曜日からのロンドン旅行のために少しばかりロンドンの天気の様子を調べてみた。幸いなことに旅行期間中は天気に恵まれ、フローニンゲンよりも気温が高いようだ。ロンドンでは半袖で過ごせるだろう。

ここ最近は毎日のように音楽理論や作曲理論の解説書を読んでいる。作曲実践だけを毎日行うのではなく、そうした解説書を読むことが日々の小さな習慣になりつつある。昨日も改めて思ったが、音楽理論や作曲理論の解説書を読むことから得られるものはやはり多い。これまでの自分が見落としていたことが次々と明るみになってくる。また、曖昧だった知識がより明確なものになっていく。

解説書を読むことは、作曲実践の最中に無意識的に行っていたことを意識化し、それを見直すことにもつながっていく。作曲上の自分の盲点及び癖を把握していくことに関して、解説書を読むことは非常に有益だ。

今日は昨日から読み進めていた作曲理論の解説書を全て読みきり、もう一度全体を確認しようと思う。何度も繰り返し読むことで知識体系が徐々に構築されていく。自分の関心に合致する書籍に関してはそれを何度も繰り返し読むことが非常に重要になる。一回の対話でその人を理解できないのと同様に、対話を重ねるかのように同じ書物に向き合っていく。書物から真に何かを得ようと思うのであれば、継続的かつ深い付き合いが大切だ。

昨日突如として降ってきた、ベートーヴェンとゴッホの芸術性及び精神性の発達に関する比較研究については本当にゆっくりと進めて行こうと思う。この研究を進める過程の中で、どれだけ関心の裾

野が広がっていくのか、そしてこの研究が人間発達や教育とどのようなつながりを持ってくるのかを考えていきたいと思う。十分に裾野が広がり、人間発達や教育に関して深く探究するに価するテーマだとわかり、それが博士論文にするほどの意義あるものであれば博士課程への進学を検討したいと思う。この研究に関してはとにかくゆっくりと関心の根を育み、ゆっくりと関心の裾野を広げていく。

ベートーヴェンとゴッホが自分に与えてくれた影響は多大であり、これからも影響を与え続けてくれるだろう。ここでもその影響はゆっくりと徐々に濃いものになっていくはずだ。影響の進度と深度に合わせる形でこの研究を進めて行こう。

今日は過去の日記を20本ほど編集したい。おそらくロンドン旅行の移動の最中にも編集作業を進めていくだろうが、その前に今日も過去の日記の編集を行いたい。20本の過去の日記を二回か三回に分けて編集していく。一気に20本の記事を編集するのではない。分割してゆっくりと編集をしていく。その方が集中して取り組むことができることを知っている。日記の編集作業以外には、昨日に引き続き音楽理論や作曲理論の解説書を読み、時間があればエリック・サティの手紙を読み進めたい。フローニンゲン：2018/6/16（土）07:44

No.1076: Next Year

One month has already passed since I came back from a London trip. Yesterday, I finally obtained the third master's degree. I may go to the fourth master's program──which may sound crazy──or a doctoral program, but anyway I'll leave from academia and take a rest for one year. I envisage that a new sky will be awaiting me next year. Groningen, 10:37, Friday, 7/20/2018

2712. 運河のほとりの一羽のカモ

今日の天気と同調するかのような気分に午前中から包まれている。薄白い雲が空全体を覆っており、太陽の姿は見えない。

先ほど昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけた。帰り道、運河のそばで休憩をしている一羽のカモを発見した。私はおもむろにそのカモに近づき、その様子を眺めていた。全身は薄い茶色

の毛で覆われており、頭の部分だけ色が違った。顔に近い部分は白い毛で覆われていたように思う。そのカモは運河の水面を眺めているようだった。

たった一羽のカモを眺めるたった一人の自分。このカモはたった一人でこんなところで何をしているのだろうか、と私は首をかしげた。だが、その理由については何となくわかるような気がした。私は目の前にいるカモに共感の念を持っていた。

たった一人で運河のほとりにたたずむカモ。そこにカモがたたずんでいることを道行く人はほとんど気づかない。この地球の反対側にいる人はこのカモの存在に気付き得るはずはない。しかし確かに私の目の前にたった一羽のカモがいる。カモの毛並みは美しく、思わず手で撫でたくなるような思いに駆られたが、それはしなかった。カモはそれを望んでいないだろうと思ったからだ。きっとそっとしておいて欲しいのだ。ただそこでそのように生きたいのだ。カモの背中はそのようなことを語っているように思えた。

つい先ほど昼食を摂り終えた。冴えない空を眺めながら、この世界に溢れる夢遊病者について考えていた。この社会が生み出す夢遊病者とそれらの夢遊病者が作るこの社会。それから金融リテラシーについてもぼんやりと考えていた。

金融リテラシーが持つ他のリテラシーと同様の性質と固有の性質について考えを巡らせていた。文字を読めることがもたらす不幸。あるいは、言語リテラシーの未熟さがもたらす不幸と金融リテラシーの未熟さがもたらす不幸について考えさせられる。リテラシーの向上を真面目な顔をして提唱する人たちの気が知れない。確かに、リテラシーを高度な次元で獲得していくことは自己の囚われからの解放とこの社会からの解放、すなわち究極的には自由の獲得につながっていくだろう。

しかし、リテラシーをそのような次元で獲得できる人は稀であり、中途半端なリテラシーを身につけてしまった人たちの末路は人生の不幸である。私たちを解放するはずのリテラシーが私たちを縛るのである。リテラシーによる呪縛と不自由、そして不幸がそこにある。

何を信じていいのかわからないような時代の色は濃さを増す。そうした迷いを払拭するほどの高度なリテラシーを求めようとする自分がいることに気づく。それは徹底的な鍛錬の末に得られるかどうかの代物であることが薄々わかっている。

© YOHEI KATO 2018

この時代の様子を表すような天気がまだ一向に変わらない。曇りだ。光を遮る雲が空を覆っている。現代社会の様子もそれとほとんど変わらないだろう。

昼食前に近所の運河で見かけたカモはどうしているだろうか。あのたった一羽のカモの存在が無性に気になる。どうして私はあのカモに話しかけなかったのだろうか。カモと私もお互いに一人だからだろうか。お互いに一人であれば話しかけても良かったのではないか。カモの背中が語っていたことがわかっただけ、それは救いなのかもしれない。フローニンゲン:2018/6/16(土)13:21

No.1077: Forlorn Crystal

A new day started again, which is the same and different day compared with yesterday. I'll tackle the same things as those yesterday, finding difference. Discover of difference enriches our daily life. Groningen, 10:55, Friday, 7/20/2018

2713. 旅行を求める内側の何か

時刻は夕方の六時を迎えた。今日は一日中曇りがちな天気であったが、今は少し青空が見える。西の空に優しい夕日が照っており、夕日はこれからゆっくりと沈んで行こうとしている。

つい今しがた過去の日記の編集を終えた。やはり一日に20本ほどの記事の編集をすることが限界のようだ。確かに心身の調子が過去の日記の編集にふさわしいような状態にあるときは一日に40本ほどであれば編集が可能である。だが今日はそのような日ではなかった。どちらかというと過去の自分の文章を読むことにそれほど気乗りしない日であった。今日編集していた記事はちょうど今から一年前ぐらい執筆したものである。

一年前の自分の日記を読んでいると、いつも思うのと同様に、もう一年前の自分はここにはいないのだと知る。関心を寄せている事柄の中には共通のものがありながらも、もう以前の関心とはまるっきり異なることに探究の矢を向けている自分がいる。

来年、そしてこれからの自分はどのようなことに関心を持って探究活動を続けていくのだろうか。自己の進化に伴って関心が変容していくというのはごく当たり前のことである。しかし、こうも激しく自己

と関心の変容が生じることは少々疲弊感を引き起こしかねない。探究の速度を少しばかり緩め、ゆとりのある形で日々を過ごしたいものである。とりわけ今日はそのようなことを朝から感じていた。

早朝の探究がいつもほど進まず、少しばかり休憩が必要なのかもしれないと思った。ちょうど四日後に出かけるロンドンへの小旅行は優れた休息の機会になるだろう。欧州での三年目の生活では、一ヶ月に一度の小旅行を行う予定だ。最初はその頻度を多いかもしれないと思ったが、今はそれぐらいの頻度がちょうど良いと思っている。

いやむしろ、それぐらいの感覚で旅行をすることを自分の深層部分の何かが求めているのだと気づく。学会への参加を兼ねてアムステルダムへ小旅行をしたのが今から二週間ほど前のことであり、今日はどことなく早くロンドンへ出かけて行きたいという気持ちになっていた。ロンドンに足を運ぶことを待ち焦がれている自分の姿を見るにつけ、今年は一ヶ月に一度欧州のどこかの国に旅行に出かけるというのはとても良い判断だと思った。自分の内側の何かが激しく旅を求めている。自分にできるのはその求めに応じることだけだ。

夕暮れ時の小鳥たちの鳴き声は朝とは違った意味で美しい。早朝の音色や響きと異なるさえずりが心を落ち着かせていく。

今日はふとしたきっかけで、ワーグナーの曲を聴き始めた。ワーグナーといえば歌劇で有名だが、ワーグナーが作曲したピアノ曲を見つけ、それを一日中聴いている。今書斎の中に流れているのもワーグナーのピアノ曲だ。私が想像していた以上にワーグナーが澄み渡るようなピアノ曲を作っていたことに驚かされる。今日は就寝までワーグナーのピアノ曲を聴き、今後も彼の曲を聴き返すことによって徐々にワーグナーのピアノ曲への理解を深めていきたい。フローニンゲン：2018/6/16（土）18:19

No.1078: A Drizzle

It is hard to imagine from the present weather, but it will drizzle in the afternoon. Groningen, 08:11, Saturday, 7/21/2018

2714. 鬱積と形象化

今日もまたある一日が終わりに差し掛かっている。時刻は夕方の七時半を迎えた。

今日は少しばかり奇妙な土曜日であった。いつもと同じような時刻に同じような状態で起床したにもかかわらず、午前中の活動時の精神の有り様はいつもと異なっていた。夕食を摂り終えた今は再びいつもの状態に戻っているが、今日の午前中の精神の様子については少しばかり考える必要がありそうだ。

とにかく焦らずにゆっくりと進むこと。これを何度も自分に言い聞かせる必要がある。何となれば私は自分に対して負荷をかけすぎるからだ。

明日からは早朝のデッサンをきちんと行うようにしたい。起床直後にその瞬間の内的感覚を絵として形にすることによって、どこか一日の活動が円滑なものになるような感覚がする。とにかく自分の内側で形になろうとするものを溜め込んではならない。様々な表現形式を用いながらその都度それを形にしていく。

自分の場合は、言葉、音楽、絵としてそれらを形にしていく。どれか一つの表現形式に偏っていてはダメである。一つの表現形式にはそれに対応する固有の造形作用があり、一つの表現形式に偏ってしまうと、その表現形式では表現できないものが内側に溜まってしまう。それが自分の内側の循環を悪くしてしまう。

今朝の状態はその表れだったのではないかと思う。内的感覚をデッサンすること自体はもう日々の習慣になっている。特に、過去に作った自分の曲を聴く際や、過去の作曲家が作り上げた曲を参考にする際には必ずデッサンをするようになった。あとは早朝のデッサンをより確かな習慣にしたい。就寝前にあらかじめノートを机の上に開いておき、色鉛筆を机の上に置いておくというのが望ましいかもしれない。今夜からそれを実践してみようと思う。

今日はこれから本日二度目の作曲実践を行う。午後に引き続き、またモーツァルトの曲に範を求めてみようと思う。明日はショパンとバッハにしようと思う。自分の内的感覚を自由自在に表現するまでの道のりは遠い。理想の境地に行き着くまでには果てしない道のりが待っている。

だが、私はそれほど悲観的ではない。どれほど時間がかかろうが、何年かかろうが、そこに向かって毎日少しずつ歩みを進めていく。もう少し技術が高まれば、毎日の食事の回数ほど曲を作る。確かに理想的には自然言語で日記を執筆するのと同じ頻度で曲を作りたい。それはまた次の段階だと思う。

その前に、毎日の食事の回数だけ曲を作る段階に向かっていく。普段の朝食は軽く、昼食と夕食は普通であるように、三曲が同じ分量を持つ必要はない。そこに濃淡やばらつきがあっても構わらない。二曲はある程度の長さの曲を作り、もう一曲はより短いものにしていく。ただし、それら三つの曲については必ず新たな仮説を持って曲を作る。あるいは、新しい何かを試す形で曲を作っていく。

午後にふと、自分の内側にある影の側面も巧みに曲として表現したいと思った。それは影を治癒するという目的よりも、影を影として正しく自分で認識したいという思いから生まれた要求である。人間精神の光と闇の双方を曲として描いでいく。時に光だけの曲や闇だけの曲があってもいい。そして、それら双方が組み込まれた曲があってもいい。

とにかく一つに偏りすぎた形では曲を作らない。なぜなら人間は光と闇の側面を絶えず持ち続けているのだから。フローニンゲン：2018/6/16（土）19:56

No.1079: Mr. & Mrs. Birds

I can hear placid birdsongs. Since I became willing to listen to Grieg's music in the early morning, I decided to listen to his works all day. Groningen, 08:29, Saturday, 7/21/2018

2715. 時代と個人の芸術性

今朝はいつもより幾分早く四時過ぎに起床した。この時間帯に目を覚ました時、外はまだ薄暗かったが、すでに小鳥たちは活動を始めていたらしく、彼らの鳴き声が外の世界に響き渡っていた。

普段より早い一日のスタートを切った日曜日の朝。今日も普段と変わらない生活を送っていく。今日は作曲理論と音楽理論に関する書籍を旺盛に読み、ゴッホの手紙も読みたいと思う。

四時過ぎに起床した時は空に薄い雲がかかっていたが、六時半を迎えようとしている今はそうした雲はほとんど無い。その代わりに、ライトブルーの青空が広がっている。気温は相変わらず低く、今週の水曜日にロンドンへ出発する日を除いては、軒並み20度を下回る気温である。自宅にいる時は長袖と長ズボンを着て生活をする日々がまだまだ続きそうだ。

昨日に計画していたように、今朝は起きてすぐに内的感覚をデッサンした。内側のものを外側に形にしながら日々の生活を営んでいくこと。形を待つものに形を与えていくことによって、やはり自分の内側の流れが円滑なものになる感覚がある。これは是非とも継続させていきたい習慣だ。

昨日改めて時代精神と個人の内側にある芸術性について考えていた。現代というのはもしかすると、個人の中に宿る芸術性を窒息させてしまうような時代なのではないかという問題意識がある。人は多分に創造的であり、芸術的であると思うのだが、そうした個人の創造性や芸術性が一向に育まれていかない時代の様相を眺めていると、現代という時代は個人の創造性や芸術性を抑圧するような何かを持っているように思えてくる。

現代の思想的・構造的な性質に合わせて、芸術教育が機能していないということにも強い問題意識を最近持っている。芸術性というものがいかに育まれていくかという理論に基づく教育、そして芸術性をいかに育んでいくかという実践的な叡智に基づく教育。そうした教育が欠落しているように思えるのは私だけではないだろう。

そうした問題意識を持って、芸術に関する教育哲学の探究に力を入れ始めている。特に、シュタイナーの芸術教育思想には考えさせられることが数多くあり、とりわけ最近はシュタイナーの思想書を読んでいる。今の私にとって、芸術教育に関する理論と実践的な叡智を学ぶ上でシュタイナーの

書籍は欠かせない。この時代が持つ、芸術性の芽を早期に紡いでしまう作用、さらには芸術性の成長を阻害する作用の根幹部分を突き詰めていく。ここに今の自分の関心の焦点がある。フローニンゲン:2018/6/17(日)06:40

2716. 絵画を眺めるように楽譜を眺めること

早朝、自宅の上空は晴れており、書斎の窓から向こうに見える遠くの空は分厚い雲に覆われていた。こちら側は晴れているのだが、向こう側は不気味な黒い雲で覆われている情景を眺めていた。こちらが晴れている分、あちらの空は黒く見えた。

それは色彩のコントラストの影響か何かなのだろうか。今はそうしたコントラストの効果が消え、灰色の薄い雲が空を覆っている様子が見える。一見すると雨が降りそうな天気なのだが、天気予報を確認すると、今日は雨は降らないらしい。一日中このような曇り空とのことである。

早朝に作曲理論のテキストを読み終えた。昨日読んだ分については再度今朝確認した。このように、記憶が新しいうちに再度読み返すということは内容理解の定着を助けてくれる。その書籍を最初に読んだのは昨年のことであり、今このようにして何度も繰り返し本書を読んでみると、自分の理解が当初に比べて格段と上がっていることに驚かされる。これが学習の成果であり、発達という現象なのだということを改めて実感する。

本書を読み終えた後、ゴッホの手紙をざっと眺めていた。この膨大な量の手紙には本当に驚かされる。今のようにコンピューターを使って文章を執筆したのではなく、手書きであのような膨大な分量の手紙をゴッホが書き残したことに改めて感銘を受ける。手紙が収められた全集に挿入されているイラストを眺めながら、ゴッホの手紙を幾つか読んでいた。これからはこの全集を頻繁に読むことになると思う。ゴッホの手紙から汲み取れるものを少しずつ汲み取っていく。

一度に多くのことを汲み取る必要はない。一度に多くのことを汲み取ろうとすると、大抵それは自分からこぼれ落ちる。そのため、少しずつ汲み取れるものを得て、その内容を咀嚼していく。

ゴッホの手紙を読み終えた後は、エリック・サティの手紙を読み始めた。ちょうど三分の二までを読み終え、本書は午前中に読み終えることができるだろう。午後からは作曲実践を交えながら、久し

ぶりにスザンヌ・クック=グロイターの論文を二つほど読み返すことができたらと思う。それら二つの論文はともに成人発達において非常に重要な内容を持っている。

先ほどゴッホの手紙を読んでいる最中に、日々の生活の中で楽譜を意識的に眺める時間をもう少し増やしていこうとふと思った。これは書き込みをしながら分析的に楽譜と向き合うというよりも、あたかも絵画作品を眺めるかのように楽譜を眺めていくことを意味する。画集を意識的に眺めることによって初めて得られるものがあるのと同様に、楽譜を意識的に眺めることによって初めて得られるものがある。曲の構造的な美を視覚的に捉えるように意識して楽譜を眺めていく。

どうしても普段の生活は活字を読んだり、活字を書いたりすることが多くなる。そのような生活を送っている時に、画集を眺めることはもちろん、楽譜上に顕現する音楽的な美を眺めることは良いアクセントにある。またそれは最上の休息でもある。これからは毎日様々な楽譜をあたかも絵画作品を眺めるかのように意識的に眺めていこうと思う。この積み重ねはきっと自分の作曲に役立っていくだろう。フローニンゲン：2018/6/17（日）08:41

2717. 外国語を学ぶ意義と人間発達

雲行きが見る見るうちに怪しくなってきている。午前中には数滴だけ雨が降るような状態が二度ほど訪れた。今は雨が降っていないが、これは天気予報とは異なって、午後からは少しばかり雨が降るような予感がする。

午前中の早い時間帯にエリック・サティの日記を読み終え、その次に発達心理学者のスザンヌ・クック=グロイターの二本の論文を読んだ。それらは査読付き論文ではないが、一つ目の論文は“Ego Development: Nine Levels of Increasing Embrace (2005)”であり、もう一つは“Comprehensive Language Awareness: A Definition of the Phenomenon and a Review of its Treatment in the Postformal Adult Development Literature (1995)”という論文だ。後者の論文については再読を進めている最中であり、昼食後の今からその続きに取り掛かりたい。

まず午前中に読み終えた前者に関しては、改めて得るものが多かったように思う。新たな観点を得たというよりも、既存の自分の観点をさらに深めてくれることにとても役立ったように感じている。特に、現在の自分の発達段階について深く内省する機会を与えてくれたことは大きい。これまでの自分の

歩みをここで改めて振り返り、ここからまた新たな歩みを進めていくための羅針盤のような役割を果たす論文だと改めて思う。

特に印象に残っているのは、後慣習的段階の発達段階の特性に関する記述を読み返している時に、自分がなぜ突如として作曲実践とデッサンを始めたのかの発達的意味がわかった。端的には、これまでの発達段階の歩みが蓄積されていき、当時の私は、自然言語で意味を造形していくことの限界に間違いなく直面していたのである。

また、自然言語では捕まえきれない内的感覚が無限に自分の内側に存在していることを直感的に把握し、それらを外側に形にするためには自然言語では不可能だということを痛感していた。そこで突如自分の眼の前に現れたのが作曲とデッサンだった。これら二つの実践方法は共に、音楽言語と絵画言語という異なる言語体系を持つ。自然言語で一度分節されてしまった「その全体世界（このリアリティの全体）」に自らの内的感覚を通じて入っていくためには作曲とデッサンが必要だったのだ。

この気づきが得られたことは自分にとってとても大きかった。それは自分が突如体験した創造活動への目覚めを発達論的に説明する上でも大切であり、同時にこれからそれらの創造活動に積極的に従事していく意味の足がかりを得られたという点においても大切であった。

後者の論文からも本当に得るものが大きい。おそらくこの論文を最初に読んだのは今から六年前のことであり、二読目は三年前に日本に一時帰国していた頃だったと思う。この論文でも取り上げられているように、言語は世界認識方法に多大な影響を与えるというサピア＝ウォーフの仮説について改めて考えていた。私はこの仮説に外国語を学ぶ本質的な意義が隠されているように思う。

自分の言語世界について考えてみると、英語とオランダ語の世界で生活するようになって以降、リアリティの地図が豊穣なものになってきているのを感じる。母国語ではない言語空間の中で生活をし続けてきたことは、自分の内側の主観的な世界と共に外側の客観的な世界の認識を間違いなく深くしている。

多様な言語体験はリアリティの多様な側面に気づかせ、それによって多様なあり方を自己に促す。日本人が外国語を学ぶ意義は、日本語で構築された自己及び自らの世界認識方法を対象化させ

ることにある。外国語を学ぶことによって外国人とコミュニケーションができることや、ビジネス上何らかの便益があるなどとというのは、人間発達の観点から見れば外国語を学ぶ意義に入らない。外国語を学ぶ意義は、日本語で構築された自らの精神的・文化的制約に気づくことにあり、そこから脱却して意味を構築し始めるようになることだろう。それが外国語を学習する本質だと思う。

しかし残念ながら周りにそのような意識を持って外国語の学習に取り組む人や、外国語を学ぶことによってそうした次元に到達した人を私はほとんど知らない。海外に居住するほとんどの日本人は、身体的には日本の外にあっても、精神的には日本の内にいるのと何ら変わりはないのではないかと思う。それほどまでに日本語という言語空間から自己を解放させることは難しいことなのだ。

日本を離れ、米国で暮らし始めた最初の年の「漱石体験」を思い出す。ロンドンで神経衰弱になった夏目漱石。この体験については過去の日記で何度か書き留めているように思うため、ここでは繰り返し書かない。言語で自らの存在を規定できなくなり、言語を用いて世界を認識することが困難になった体験。

そこから一年ほど隔週で知り合いのサイコセラピストのもとに通い、少しずつこの体験を消化していったことを思い出す。自然言語を用いて自己を規定することが困難になるというのは、間違いなく実存的危機の一種であるため、そうした経験を多くの人がする必要は全くないと思う。

ただしそうだとしても、日本人の外国語を学ぶ姿勢や国外で暮らす日本人の精神生活の有り様はもう少し真面目に見直されるべきではないだろうか。日本国内でただ異質な言語記号を眺めることや、身体だけ日本の外にあるということに何か意味はあるのだろうか。少なくとも発達的な意味はそこにはない。フローニンゲン:2018/6/17(日)13:04

2718.「外国語を学ぶ意義」の続き

昼食を摂ってからしばらくの時間、スザンヌ・クック=グロイターの論文の続きを読んでいた。クック=グロイターが指摘しているように、外国語を学ぶことは自己の特性を理解する上で非常に重要な役割を果たすと私も考えている。それは単に認知的な同意というよりも、自分個人の言語体験に根ざした上での同意である。

外国語を学ぶことは、単に自らの思考のあり方に気づくということだけではなく、自らの日本人性にも気づくことに本質的にはつながる。先ほどの日記で書き留めていたように、ほとんどの外国語学習者は、外国語を通じて自分の世界認識方法を客観的に捉え直したり、日本語空間を対象化させることができない状況にある。

そうした状況に留まっているのであるから、自らの日本人性を理解することなどできなくて当然と言えば当然である。自己を本当に深く知ろうとしたら、外国語を徹底的に学ぶことは必要不可欠なのではないかとここ最近よく思う。本当にごく稀に、日本語だけを鍛錬し続けることによって自らの思考のあり方や自己の日本人性の本質に気付ける人もいることはいるが、それは本当にごく少数だ。

相変わらず空には分厚い雲が覆っている。ただし、少しばかり日が差し込む瞬間もある。今日は少しばかり不思議な天気だ。

外国語を真に学び始めた時のことを思い出す。私にとってそうした真の外国語習得への一歩は、日本を離れ、身体も思考も日本の外に置き始めて初めてもたらされた。外国語を真に学び始めた当初は、自分の中にどこか異星人を住まわせるような感覚だった。あるいは、異星人を自らの内側に育み、それと生活を共にするような感覚だ。

そうした期間はおそらく米国で生活した四年ほど続いていたように思う。四年ほどの月日が経ってみると、今度は自分の中に存在していた異星人の感覚が少しばかり変容を遂げたことが印象に残っている。

その異星人すらも実は自己の一側面に過ぎず、同時にそれは自己の本質の一端を担っているという気づきが芽生え出したのだ。欧米での生活も七年目を迎えようとしているが、日本語空間で生活を営む自分も、外国語空間で生活を営む自分も、どちらも共に自己の一側面であり、両者は外見上は異なっていながらも、深層的にはつながっているものだということを知る。今は両者が同時に自分の内側に居住しており、争いをすることもない。お互いがあるべき場所にしかるべく形で存在している。

© YOHEI KATO 2018

この一年の間に作曲実践とデッサンの実践を始めたことに伴い、自然言語を媒介しない意識状態に入ることが増えてきた。そうした状態に日々参入することによって、自分の内側にいる日本語空間を司る自己と、外国語空間を司る自己の存在の在り様と意義はまた変容していくだろう。

自然言語及び自然言語以外の言語手段による意味の創造と自己表現、そして意識の在り方とその発達というテーマは非常に興味深い。今後も自らの経験と照らし合わせながらそれらのテーマについて継続的に考察を深めていきたい。フローニンゲン:2018/6/17(日)13:52

2719. 変容作用を持つ曲の創出に向けて

時刻は午後八時を迎えた。先ほど瞬間的に雨滴が空から落ちてきたが、空は晴れ、今は暮れ行く西日が地上に降り注いでいる。

今日は昼寝をしている最中、印象的な内的ビジョンを見た。広大な砂漠がそこに現れ、砂漠の大地が太陽の光で輝いていた。大地を駆け抜けていくかのようにビジョンが移り変わり、最後にはオアシスと様々な色に彩られた街を発見した。徐々にビジョンが消えていき、そこで昼寝から目覚めた。

今日は午前中にエリック・サティの手紙を読んだことに触発されてか、サティの曲に範を求めて午後に曲を作った。日常を新たな眼で見ることを誘う音楽、既存の感覚を一新するような音の創出を実現したいという思いが強くなる。

これは以前から芽生えていた関心であったが、それが実現するのは本当に気の遠くなる程先のことだと理解している。だがその実現に向けた足取りは全く苦ではなく、そこには絶えず小さな喜びと進歩の実感がある。そうした実感があることに本当に感謝しなければならない。それさえあれば自分はどこまでも進んでいけるような気がする。

夕方から、先日に購入した“Expanding Tonal Awareness: A Musical Exploration of the Evolution of Consciousness (2014)”という書籍を読み始めた。読み始めてすぐにこの書籍の虜になった。ここ最近購入した書籍の中では最も私の関心を引く書籍だと言っていいかもしれない。著者はルドルフ・シュタイナーの思想に影響を受けている音楽理論家かつ作曲家であり、本書に記述されている内容の一つ一つが私の心を完全に掴んでいた。

人間の発達と音楽がこのように結びつき得ることに驚かされた。端的に述べれば、本書は人間の意識の発達と音楽形態の発達とを関連付けている。さらには、人間の意識と調性感覚の発達モデルについて紹介していると述べてもいいだろう。この書籍は本当に何度も繰り返し読みたいと思う。先ほど一読を終え、明日も簡単に再読をしたいと思う。

既存の音楽理論に関する解説書を読むことはもちろん作曲において重要だが、そうした書籍ばかり読んでいても自分が実現したい曲を作ることはできない。ある意味、これまで学んできた意識の形而上学やシュタイナーの思想などを組み合わせることによって、日常を新たな眼で見られるような感覚を引き起こす曲を作っていきたい。それは端的には、意識の変容作用のある曲ということになるだろう。そうした曲を作っていくために、今日はこれからもう一曲ほど曲を作りたい。

上記の書籍があまりに洞察に溢れるものであったため、関連書籍を調べたところ、三冊ほど興味深い書籍を見つけた。“Human Hearing and the Reality of Music(2013)”と“The Inner Nature of Music and the Experience of Tone (1983)”をドイツのアマゾンから取り寄せ、“Intervals, Scales, Tones: And the Concert Pitch c = 128 Hz (2015)”をイギリスのアマゾンから取り寄せることにした。

この夏は音楽理論と作曲理論に関する手持ちの書籍を繰り返し読むと共に、今月に新しく購入した何冊かの書籍を何度も読んでいきたいと思う。できる限り多くの知識を実践を通じて血肉化し、確実に我が物にしたい。フローニンゲン:2018/6/17(日)20:28

2720. 迫る旅に向けた期待と音楽体験の不思議さ

週末が終わり、今日から新たな週を迎えた。気がつけば、ロンドン旅行に向けた出発まであと二日となった。明日の夜は旅行に向けた荷造りをしようと思う。そして今日は、七月の半ばに予定していた、デ・ホーヘ・フェルウェ国立公園内にあるクレラー・ミュラー美術館を訪れる二泊三日の小旅行に向けてホテルを確保しておきたい。

昨年の11月に訪れた時と同じホテルに宿泊するか、あるいは前回とは違うホテルにするかをまた後ほど考えたいと思う。日々の探究活動の合間に旅を時折挟むこと。それが今うまく回り始めている。こうした生活を欧州での三年目に確立していく。書物から得られることが多いのと同時に、旅から得られるものも本当に多い。昨夜は就寝前に改めてそのようなことを考えていた。

日々書物を読み、時折旅に出かけ、そして日記の執筆と作曲実践という創造活動に耐えず従事していくこと。自分の中で、読書、旅、日記、作曲が全て等しい重要性を持ちながら一つの大きな生活実践へと昇華されつつあるのを実感する。これを完全な一つの形にすることが欧州での三年目の生活に求められていることだ。またそうしたことを行うために私はもう一年ここに残ることになったのだと思う。

とにかくそれを実現させることに近づく行動だけを取り、それから離れることを招き得る行動は取らないようにする。この一年を欧州の地でいかように過ごすかは今後の人生において決定的な重要性を帯びているように思えてくる。

今朝はあまり小鳥の鳴き声がしない。どうしたのだろうか。その代わりにたった今、数羽のカラスが雄叫びを上げながら飛び去っていったのを目撃した。

昨日は一日が終わりに近づくにつれて雲間から太陽の光が差し込んできた。事実、就寝前の午後10時あたりには暮れ行く夕日の姿を眺めた。今朝は一転して、薄い雲が空全体を覆っている。今日は基本的には一日中曇りであり、昼の前後に小雨が降るようだ。

今朝起床直後に描いた絵は、太陽と海を象徴するような内容を持っていた。夕日に照らされる海。海面に夕日の光が揺らめいているあの光景を描いた。なぜ私は早朝にそのような主題の絵を描いていたのかはわからない。だがそれを描き終わった後、何かが浄化されるような感覚があった。内的感覚を絵として形にすることの恩恵のようなものを感じた。これは作曲についても全く同様である。

昨日改めて、音楽は不思議な存在だと思った。というのも、他の芸術作品と異なって、音楽は目に見えるような形を生み出さず、音楽空間という目には見えないものを生み出すことに作品形式としての特徴を持つからだ。

確かに、楽譜を一つの形と見れなくもないが、それは実際の音楽体験を生み出すための装置でしかなく、極論をすれば単なる記号表現に過ぎない。音楽の鑑賞者は、そうした記号から意味を得ているのではなく、記号から生まれる音を鑑賞し、そこから意味や体験を得る。

昨日読んでいた書籍にも書かれていたが、そう考えてみると、音楽というのは非常に抽象的な世界でなされる営みであり、形を持たない音には特殊な純粋性があるのだと思う。他の芸術と音楽との比較、および音の性質については引き続き考えを深めていきたいと思う。今日はこれから作曲実践をする。今日は作曲から一日を始めたい気分だ。フローニンゲン：2018/6/18（月）06:43